園だより１０月

おのおのの部分は分に応じて働いて体を成長させ、
自ら愛によって造り上げられてゆくのです。
エフェソの信徒への手紙４章 16 節

日中の幼稚園ではまだまだ日差しの強さに負けてしまいそうになる日もありますが、吹き抜ける風には秋を感じます。先日、ドングリを大事そうに手のひらいっぱいに登園してきたお友達がいました。赤とんぼもときどき園庭を気持ちよさそうに飛んでいます。季節は秋に変わってきています。

子どもたちが遊ぶ様子にも変化を感じています。大きなプールが仕舞われ（お手伝いくださった保護者の皆様、ほんとうに有難うございました）、園庭全体が見渡せる広い空間が戻ってくると、やっぱり子どもたちの動きが大らかになり、それぞれに遊ぶ姿をお互いが認め合えるようになりました。そこから遊びへの探求が広がっていっています。

ある日の朝、園庭での子どもたちのお迎えを終え事務所に入ろうとしたとき、事務所前の跳び箱や平均台が置いてあるところで年少組の男の子Ａ君に声をかけられました。「ねえ、手伝って」、その声に近寄りますと、「園長先生、このマット一緒にそこに乗せて」と大きなマットを跳び箱に乗せようとしています。私も少し手を添え何とかマットを跳び箱の上に乗せました。２台並んでいる跳び箱に１枚のマットを乗せると、次にもう１枚のマットをずらして乗せました。そしてもう１枚をさらにずらして斜めになるように乗せると、マットの坂が出来上がりました。私は「もしかしたら滑り台を作りたいのかな」と思いました。この場所では年長・中の子どもたちが跳び箱に平均台の足をかけ斜めにし、その上にマットを並べて乗せ、できた坂を滑ったり登ったりしてよく遊んでいるのです。Ａ君はそれをイメージして自分で作ろうとしているのでは・・と思いました。Ａ君が作ったマットだけで作られた坂も滑ることは出来なくはないのですが、滑るとおしりと一緒にマットも滑って地面に落ちます。けれども Ａ 君はその状態をものともせず、その度にマットを持ち上げ坂を作りまた滑ります。私は平均台に気持ちが向いたらと、「これは？」と平均台を指差し声をかけてみました。するとＡ君は「これはここ！」と即断言しました。坂に上るまでの通り道として平均台を考えていたようです。Ａ君は目の前にある様々な素材（この時はマットや跳び箱、平均台）を駆使し、私が想像するよりもはるかに深く想いを巡らし、自作の滑り台の完成をしっかりとイメージし、工夫をしていました。客観的には滑り台として十分に機能しているとは思えない側面もあったのですが、そのときのＡ君にとっては大満足な出来栄えだったように思います。その嬉しそうに繰り返し遊ぶＡ君の姿に引き寄せられ「仲間に入れて」とやってくる子どもたち。Ａ君は友だちが滑り地面に落ちたマットをその都度坂に直し一緒に楽しんでいました。Ａ君は思い描いた一つ一つを実現し遊びを楽しんだことに、どれほどの満足と達成感を感じていたことかと思います。

心地よい気候になりつつある１０月の日々も、それぞれに遊びを展開するとき、存分に思いを巡らし想像し、わくわくしながら表現するその「とき」を保証し、友だちや先生たちと十分に喜びを分かち合いながら成長する子どもたちを見守って参りたいと願います。様々にご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

園長　駿河　幸子